

2015 年度 第 1 四半期 連結業績
国内機関投資家・アナリスト向けカンファレンスコール Q&A(要旨)

日 時:2015 年 8 月 7 日 16:00-16:40

回答者:ソニーフィナンシャルホールディングス 常務取締役 清宮 裕晶

ソニー生命 執行役員 大里 祐二

ソニー損保 執行役員 石井 隆行

ソニー銀行 執行役員 溝口 純生

※内容については、理解し易いよう部分的な加筆・修正および QA 順序の並べ替えをしております。

Q1:【生命】

基礎利益から順ざやを引き、最低保証にかかる責任準備金繰入を調整すると、2014 年度第 1 四半期に比べ低くなるが、何が要因か？

A:

保険金支払が増加したこと、好調な新契約獲得に伴って新契約獲得費用の負担が増加したことが要因である。2015 年度第1四半期は比較的高額な保険金支払が重なったが、一時的な要因と考えている。

Q2:【生命】

変額保険の最低保証に係る責任準備金繰入額は 2015 年度第1四半期では 66 億円、変額保険に係るヘッジ損益は 19 億円とのことから、最低保証に係る責任準備金の実質的な利益への影響額は 66 億円+19 億円という理解で良いか？ すなわち、変額保険の最低保証に係る責任準備金繰入額 66 億円には、ヘッジ損益に対応している部分も含まれているのか？

A:

考え方としては、そのとおり。

変額保険の最低保証に係る責任準備金繰入額が 66 億円となった要因は、新契約が販売好調であった影響が大きい。ヘッジについては、外国株式などはヘッジしていないため、市況変動の影響を完全にヘッジしているわけではない。

Q3:【生命】

ソニー生命の 2015 年度第 2 四半期以降の新契約の状況は？8 月からのファンド制限により、変額保険の販売はすでに抑制がかかっているのか？また、変額保険以外の商品の販売状況は？

A:

2015 年 8 月からの変額保険のファンド制限は、8 つのファンドのうち、ボラティリティの高いファンドへの集中加入を抑制し、さらに 2015 年度第 4 四半期には料率改定を予定しており、収益性改善を図る。なお、2015 年7月までは変額保険の新契約に制限がかからないため、2015 年度第1四半期と第 2 四半期の7月までは変額保険の販売が好調である。8 月以降はこの反動により、変額保険の販売量は減少していくと

想定している。その他の商品については、2014 年度から死亡保障強化の取組みを実施しているため、全体として変額保険の 8 月以降の減少が業績の足を大きく引っ張るということにはならないと考えている。
(追加 Q:2015 年第 1 四半期の 3 カ月と比較して、7 月に極端に変額保険の新契約が増加する可能性は?)

2015 年 7 月単月で第 1 四半期の 3 カ月を超えるほどにはならない。

Q4:【生命】

好調であった家族収入保険は、新契約高が何%くらい増加したのか? また、なぜ家族収入保険の販売が伸びるのか?

A:

家族収入保険の新契約高は前年同期比 22%増加した。2014 年 10 月から新商品を発売し、商品性でお客様から評価いただいている点と 2014 年度からの死亡保障強化の取組みの相乗効果によるものである。

Q5:【生命】

事業費が前年同期比で増加している要因は何か?

A:

新契約獲得が好調であることによるコミッションの増加が主な要因。

Q6:【生命】

有価証券売却益計上の背景をどのように考えればよいのか? 変額保険の責任準備金の繰入負担増加を相殺する意味合いを持つのか?

A:

2015 年度第 1 四半期の有価証券売却益は、国債の入れ替えに伴い、残存期間の短くなった国債の超長期債への入替を積極化したものである。変額保険の責任準備金の繰入負担増加とは切り離して考えている。

Q7:【生命】

現在の想定通りに変額保険の販売が推移した場合、2015 年度通期の業績予想達成のためには、一定程度の有価証券売却益が必要になってくるのか?

A:

変額保険の販売動向について、8 月以降は落ち着いてくると想定はしているが、確実とは言えない。2015 年度第 1 四半期は、変額保険の販売量が計画よりも多かったと考えているが、第 2 四半期以降はその反動も想定している。現時点では、2015 年度の販売量の計画を超えて、変額保険が売れると想定していないため、業績見通しを変えていない。

一方、債券売却益は 2015 年度に約 80 億円計上することを計画していたが、計画を策定した 2015 年 1 月～2 月頃と比較して、足元は国債の流動性も良くなってきている。変額保険の責任準備金繰入負担増

と債券売却益を別々に考えているが、債券の入れ替えを積極化するというプラス要因も考慮し、2015 年度通期予想を現時点では据え置いている。

Q8:【生命】

新契約マージンが、2015 年度第 1 四半期末で 3.2%に低下しているが、商品構成の変化の影響とは、具体的に何か？

A:

金利上昇のプラス要因があったものの、商品構成の変化により新契約マージンが低下した。この商品構成の変化の大部分が、変額保険の販売好調によるものである。これについては、ファンド制限と料率改定による対策を講じるため、新契約マージンは現在の水準より下がることはないと考えている。

(追加 Q:今後の新契約マージンは、マーケットとの相関性でどのように見ていければ良いか？)

ボラティリティの高いファンドへの資金の流入を一定程度に制限する対策を打っているため、これによってボラティリティは低下し、新契約マージンは上昇する。

Q9:【生命】

変額保険や家族収入保険の新契約マージンに占める割合は大体どのくらいか？ 2015 年度第 1 四半期と前年同期ではどうか？

A:

2015 年度第 1 四半期は年換算保険料ベースで、変額保険の割合は約 20%、家族収入保険は 5%くらいである。また、2014 年度第 1 四半期では、変額保険は約 10%、家族収入保険は 5%よりも少し低いくらいである。個別商品の収益性については回答を差し控えたい。

Q10:【生命】

ESR の計算上、日本国債のリスク・ウェイトは、現状、どのような仮定になっているのか？

A:

日本国債の信用リスクはゼロカウントだが、金利変動リスクはカウントしている。

Q11:【損保】

2015 年度第 1 四半期と前年同期における支払備金の繰入・戻入の動きについて説明して欲しい。

A:

2013 年度第 4 四半期の自然災害(雪害)の影響により、2014 年度第 1 四半期は支払備金の戻入額が増加した。2014 年度第 4 四半期には大きな自然災害が特段なかったため、2015 年度第 1 四半期は戻入額が減少した。全体的な支払備金の状況は、事故率の低下傾向にあった 2014 年度と比較して、2015 年度第 1 四半期は事故率の下げ止まり、低位安定しているため、支払備金の残高は少し増加傾向にある。

(追加 Q:修正経常利益が 6 億円減益になっている。2014 年度第 1 四半期の支払備金戻入は保険金支払に転化し、修正経常利益には影響していないと考えれば、修正経常利益の減益は、支払備金が要因ではなく、事業費の増加による点が大きいという理解で良いか？)

その通り。

Q12:【損保】

新商品「やさしい運転キャッシュバック型」の販売状況は？現在のマーケティングの取組み状況は？

A:

具体的な件数は控えさせていただく。当初、若年層をターゲットに考えていたが、新聞中心に広告展開していたため、想定よりも契約者の年齢層が高い結果となった。そのため現在は、主な出稿媒体を新聞以外のメディアにシフトし、若年層の獲得を図っているところである。

以上